



著者プロフィール

榎本好宏（えのもと・よしひろ）

昭和12年東京生まれ。同45年「杉」創刊に参画、森澄雄に師事、同49年より18年半にわたり同誌編集長。現在、「杉」「件」同人、「會津」選者、読売新聞地方版選者。著書に『森澄雄とともに』『俳句この豊かなるもの』『俳句入門』『季語源成り立ち辞典』『大きな活字 季語辞典』『季語の来歴』『江戸期の俳人たち』など、句集に『寄竹』『素声』『方寸』『四序』『三遠』『奥会津珊々』『会景』などがある。俳人協会、日本文藝家協会、日本エッセイスト・クラブ、日本地名研究所各会員。

〈句集『祭詩』より転載〉〈2008年11月時点〉

『祭詩』（自選15句）

榎本 好宏

笛子鳴く己れ養ふ声にして
天山へ春の鷹とし巢立ちけり
どの歳も川に開かれ雑の日
花筏明りといへる淀みあり
独活食うて世に百尋も後れけり
鼻にリウの匂ひを聴きにゆく
参道に鯨の風干し尾が反りぬ
犀星の句の青梅に及ばねど
麦秋の飯粒乾びし狐塚
氷旗太宰入水の日なりけり
誰彼も家居のよはひ長崎屋
振り返る誰もさうして烏瓜
翁忌の明くれば霜の嵐雪忌
をどこみな死に難かりき龍の玉
五山いま柿衣の色に年詰まる